

こだわりの60年 その2

次の日に学校に行ったところ、ことの次第を私の母から聞いた担任が、4人を呼んでこう言った。「初めからできないことをしようとするからうまくいかないんだ」

この理不尽をどう解決すればわからないと思った。けれど、事の次第は、うまく進んでガラスは元通りになっている。そこで、何か言えばいいのに、何も言わずに済ませてしまった。譲れないのだから譲れない自分を突き詰めればよかったのに、そうしなかった幼さが恥ずかしかった。

高校になって、やはり挫折があった。野球部生活は3週間でとん挫した。出版委員会に入り、新聞づくりに熱中した。熱中するものが欲しかった。同志というか同級生たちとの活動がとても面白かった。先輩や後輩にも恵まれた。出版委員会から生徒会長になるとき、自分が決めて自分で選挙演説をした。だれもが理解しないようなことを延々と saying していた記憶がある。先輩が、「ゆっくり話せ。きちんとゆっくり話せば話が通じるから」と一番前で大きな声でアドバイスしてくれたが、舞い上がっていたので何を話しているのかつじつまが合わないと思っていた。でも、これで落ちて納得だと思いつつながら、磐城高校のあるべき姿を偉そうに語っていた。ガラスの件以来、わだかまっていたおりこうさんの自分が、おりこうさんではなくても受け入れようとする自分にとってもほっとしたのを覚えている。

結果、生徒会長には、賛成770票対反対750票の僅差で信任された。助けてくれる仲間たちが応援してくれた。とてもうれしかったのを覚えている。

こうありたいのにそうできないことに、生徒たちは悩んでいる。うまくいきたいと思うより、自分の思っている通りに表現したいが、様々なことに気兼ねして思うようにならず、自分を傷つける。

そういうことをあらかじめ教えておかねばと思うが、最初からうまくいかないことを前面に押し出して説明するのも気が引ける。

ただし、そんな可能性を持つことは是が非にも伝えておかねばならない。

挫折ばかりの毎日を過ごすことがあっても、必ず自分の頭できちんと考え、その根拠を明確にし、自分の体＝腑に落ちることを重ねていくことが、本当の成長であることは言うまでもない。部活動をやっていても、様々な生徒会活動を行っていても、やりがいと結果のやり取りや、自分とのせめぎあいと納得の仕方のありかたを学ばないと、次につながらないであろう。

その経験は、やがて自分の中で大きく変容し、さらなる進化のためのこにもなるのではないだろうか。

子どもたちは、毎日そんなことを考え、過ごしていることは間違いない。